

高校生の取り組みの様子

沖縄に発生した台風の影響で雨模様の中、バスは中央道を中津川市鉱物博物館へ向かう。高速道路に入ると、足立先生が道路沿いのコナラの木がカシノナガキクイムシというキクイムシの一種の影響で、赤く枯死して点在する様子を説明してくださった。生徒は興味深く車窓から木々を眺めていた。

屏風山 PA では山の尾根が断層により三角末端面を形成し、屏風のような山になったことなどの話を聞いたり、瑞浪の貝化石の屋外展示ケースを見たりした。この辺りに自生するというナンジャモンジャの木が植えてあったのだが、足立先生いわく「特徴からこれは違う木ではないか」と。生徒たちは鉱物の専門家にして植物の知識も豊富であることに感心した。

途中、道の駅「きりら」に寄り、阿寺断層のようすを現在の地形から見ることを教えてもらった。細いあぜ道を奥まで入り見る。私有地ではないかと思われるところも通る。普通なら遠慮してしまうところだが、専門家の後にくっついていくと堂々と行ける。

中津川市鉱物博物館に着くと学芸員の方から断層のできるメカニズムの説明を受け、館内の展示を二手に分かれて見て回った。理科の授業で鉱物を同定する方法を教わったことなどを思い出し、友人と「あれは難しかったね」と談笑する者もいた。

いずれの場面でも生徒の質問がなかなか出ず、大谷校長が足立先生に質問することが多かった。鋭い質問に、「大谷先生は頭がいい」と感想を言う生徒もいた。大谷先生はロールモデルとしての役割を果たそうとしたのだろう。質問をすることは、話題に関心をもっていることを相手に伝えることになり、優れた講義の後では、山ほど質問があつて当然である。質問は話者に対して失礼なことと考える人がいるが、これは逆である。よい質問をすることは質問者の思考の質の高さをも表している。ただし、この後生徒の質問がたくさん出るようになったかと言うと、そうでもない。生徒ができるような質問を、年齢が近い TA の学生が(ニア)ピアロールモデルとしてすることで、生徒からの質問を多く引き出すことが可能だったかもしれない。常々思うことであるが、生徒の「質問力」を身につける教育も必要だ。

(附属学校教諭 鈴木克彦)

